

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 28 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02197

研究課題名(和文) ヴァルター・ベンヤミンの歴史哲学の総合的研究

研究課題名(英文) A comprehensive study of Walter Benjamin's philosophy of history

研究代表者

森田 團 (Morita, Dan)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：40554449

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ヴァルター・ベンヤミンの歴史哲学を、その言語哲学との関係、同時代の哲学(とりわけローゼンツヴァイクとハイデガーの哲学)、ならびに隣接諸学(美術史とフロイトの精神分析学)との関係において解き明かそうと試みた。歴史的生の理解は、生の表現手段である言語、ないし記号のあり方(このあり方は、ベンヤミンにおいては芸術作品の分析によって明らかにされる)と切り離せず、この言語の在り方こそが歴史的事実の命運を規定しているという認識が、ベンヤミンの歴史哲学の根底に存している。このように、ベンヤミンにとって歴史哲学とは、言語と芸術への洞察をもとに、近代の生の命運を過去から読み取ることなのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

歴史的生の、とりわけ近代における生は、時代の言語使用のあり方に拘束されているという認識が、ベンヤミンの歴史哲学を規定している。その際、ベンヤミンの芸術作品の分析は、言語と歴史との具体的な関係を明らかにしようとする試みであるとみなすことができる。このような言語、芸術、歴史をめぐるベンヤミンの思考、そしてその内的連関は、十分に究明されたとは言えない。ベンヤミンの哲学を、総合的に検討するという作業は、その内的連関が見通しにくかったがゆえに、十分に行われてこなかったからである。本研究は、そのような内的連関を、ベンヤミンの歴史哲学的思考を軸に解明しようとした点に新たな学術的な意味をもつ。

研究成果の概要(英文)： This study delineates Walter Benjamin's philosophy of history in terms of his philosophy of language, while considering the contemporary philosophy and adjacent sciences, particularly, art history and Freud's psychoanalysis as well as the philosophy of Heidegger und Rosenzweig. Benjamin's perspective of human beings is inseparable from his perception of language, the means through which people express themselves in their own time. A specific form of language, such as the allegorical usage of words determines the historical existence of human beings. From this standpoint, Benjamin's analysis of the work of art may be deemed an attempt to discern the historical destiny of human existence read solely from the semiotic aspect of language. This insight enables, for the first time, the discovery and redemption of the genuine past. In this sense, Benjamin's philosophy of history is founded on his apperception of language and works of art.

研究分野：哲学

キーワード：ベンヤミン 歴史哲学 言語哲学 芸術哲学 ハイデガー ローゼンツヴァイク

1. 研究開始当初の背景

2011年3月に出版された『ベンヤミン 媒質の哲学』において研究代表者は、ヴァルター・ベンヤミン(1892-1940)の哲学を「媒質 Medium」の概念を手掛かりに、カッシーラーとクラークスの哲学との対比を通じて、その言語哲学とイメージの哲学、ならびに両者の連関から構成されるものとして描き出した。しかし、ベンヤミンの哲学は、その最終形態においてやはり歴史哲学である。同書の結論において歴史哲学に向かうベンヤミンの思考が、彼独自の言語哲学とイメージの哲学に基づいていることを示唆したが、それを受け基盤研究(C)「ヴァルター・ベンヤミンとドイツ歴史哲学の総合的研究」(2013-2017)では、ベンヤミンの歴史哲学的思考の基盤をなす同時代の哲学者たちの思考を精査しながら、ベンヤミンの哲学の解明を試みた。この成果を基盤に、本研究ではより詳細なテキスト読解に基づいて、ベンヤミンの歴史哲学的思考をその言語をめぐる思考に関係づけながら、また同時代の諸学の達成を参照しながら、解明することを試みた。

2. 研究の目的

本研究はヴァルター・ベンヤミン(1892-1940)の歴史と言語をめぐる思考の内的な連関を、(1)19世紀末から20世紀初頭におけるドイツの歴史哲学ならびに言語哲学、(2)同時代の諸学の達成(とりわけ精神分析学、美術史の理論、神学)を参照しながら重層的に考察することによって、ベンヤミンの歴史哲学がいかに言語哲学的思考に支えられているかを明らかにしたうえで、最終的にベンヤミンの歴史哲学的思考の固有性を解明することを目的とした。

歴史哲学とは、歴史認識を自らの歴史的事実との関わりにおいて基礎づける試みと解されるが、20世紀初頭のドイツという危機の時代における歴史哲学的思考の解明、とりわけベンヤミンのその解明を通して、本研究は、混迷を深める現在において「私たちはどこから来たのか、私たちは誰か、私たちはどこに行くのか」(エルンスト・ブロッホ)という歴史哲学的な問いを、再び引き受け、問い直す可能性を開くこと改めて準備せんとした。

3. 研究の方法

研究は以下の三つの観点に分けて行われた。(1)ベンヤミンにおける言語哲学と歴史哲学の関係の究明、(2)ベンヤミンの歴史哲学と言語哲学の結節点にあるアレゴリーをめぐる思考を諸学の達成との関連における考察、(3)以上を踏まえた成果を同時代の哲学、とりわけハイデガーの思考と対決させることによる、ベンヤミンの哲学の独自性の明確化である。それぞれを基本的に一年から一年半かけて行われる研究テーマに設定し、そのテーマのもと複数の研究会を研究連携者の協力のもと主催し、発表を行うことで、研究を遂行した。その際、いくつかの学会発表や研究会での発表も研究進展のために活用した。以上のような手続きを経ることで、研究の深化が図られた。

4. 研究成果

(1)ベンヤミンの歴史哲学と言語哲学との関係については、まずベンヤミンの言語哲学、とりわけ「翻訳者の課題」(1921)を中心に、同時期(1920年代初頭)に書かれた残された断片、ベンヤミン自身によって「語と概念」あるいは「言語とロゴス」と名づけられた、最終的には挫折する教授資格申請論文の企てを読み解くことで、とりわけ象徴と非-伝達可能性の概念の解明に力を注いだ。これらの概念は「翻訳者の課題」の最終部においても問題になるものである。その成果は『思想』(2017年7月号)に掲載された「非 伝達可能性の象徴としての言語 ベンヤミンにおける記号への問い」にまとめられたが、本研究の出発点を形成することとなった。

そこで中心となる洞察は、ベンヤミンの言語哲学が、意味の表出を担うと同時に、意味の純粋な顕現を阻害するという記号のあり方を、ベンヤミンにおける理想言語とも言える 純粋言語 との関係において認識することにあるというものであり、そこにベンヤミン固有の時間性の理解、ひいては歴史性の理解の萌芽が見られるというものであった。

さらに 2018 年 7 月の早稲田哲学会でのシンポジウム発表「純粋な言葉としての記号 ヘルダーリンと悲劇的実存」においては、言語と記号という主題を受け継ぎ、ベンヤミンの思考の源泉としてのヘルダーリンを扱った。

(2) 同時代の哲学、また美術史と精神分析学との関係については、まずベンヤミンとフロイトとの関係を考察する準備のために、フロイトの心的装置についての発表を行った(「心的装置と幻覚

フロイトにおけるイメージの起源」、形象論研究会 特別公開研究会、京都工芸繊維大学、2018 年 2 月)。また 2019 年、2020 年の大学院演習ではフロイトの『トーテムとタブー』(1913)をとりあげ、そこにおける呪術の概念とベンヤミンの思想との関連について折に触れて考察した。『トーテムとタブー』は、ベンヤミンの言語論を考える際に必要不可欠な基盤であり、『トーテムとタブー』を演習で扱うことができたことは、ひとつの成果である。

ベンヤミンは、「複製技術時代の芸術作品」において、ウィーン美術史家アロイス・リーゲルの『後期ローマの美術工芸』(1901)における触覚の概念を参照しながら、芸術作品の新たな受容について考察している。このことを主題にした発表「触覚の概念をめぐる ベンヤミンとリーゲル」(シンポジウム「東方キリスト教との出会い」、西南学院大学博物館、2018 年 2 月)では、その影響関係の内実を明らかにしようと試みた。

「まなざしの原史 ベンヤミン『ベルリンの幼年時代』の「回廊」をめぐる」(『形象』、第 4 号、2019 年)では、イメージならびにアレゴリーとまなざしとの根本的な関係を考察した。『ベルリンの幼年時代』は幼年期の回想を主題としているが、そこで展開されているのは、同時に幼年期のまなざしを根本的に規定するものの考察でもある。すなわち、この書物はベンヤミンのイメージ論を考察するにあたって必要不可欠なもののひとつである。上記論文において、『ベルリンの幼年時代』に基づいてベンヤミンのイメージ論の基礎的な洞察を明らかにできたことは、大きな成果のひとつである。

さらに「廃墟としての文字 ベンヤミンにおけるイメージの問題の一側面」(第 15 回形象論研究会、オンライン開催、2020 年 9 月)と題した発表では、ベンヤミン自身のアレゴリー概念を、十七世紀悲劇の表現形式の分析に基づいて再検討した。

(3) ベンヤミンとハイデガーとの関係を考えるために、『存在と時間』における言語と記号の問題を扱った発表を行い、それに基づく論文を公表した(「罪のしるしとしての現存在 『存在と時間』における言語の根拠への問い」、『Zuspiel』、第 1 巻、2017 年)。この論文では言語を用いる現存在の構造そのものが記号の構造と類似していることを指摘した。

またベンヤミンの歴史哲学にかかわる問題を、まず美学的観点から研究した発表を行った。その際、哲学史的な連関を重視し、フィヒテの自我論とヘルマン・コーエンの美学を参照しながら、ベンヤミンにおける芸術作品の理解と感情の問題について研究を進めた。その成果はフンボルトコレク 2019 東京「神経系人文学と経験美学」にて発表した(「Zwischen philosophischer und empirischer Ästhetik: Form, Gefühl und die ästhetische Erkenntnis」)。

またレヴィナス協会でのシンポジウム「レヴィナスとローゼンツヴァイク 歴史と物語をめぐる」(同志社大学、2019 年 9 月)での発表を基盤にした論文「『救済の星』における性格の概念 ローゼンツヴァイクによる人間概念の再解釈」では、ローゼンツヴァイクの人間概念の構成についての考察を、性格概念を手掛かりに行った。ローゼンツヴァイクの人間理解を、反復と瞬間という二つの時間形式との関連において解釈したものである。ローゼンツヴァイクのベンヤミンへの影響は、とりわけ『ドイツ悲劇の根源』において色濃くみられるが、そこでの悲劇論を考えるためにも、ローゼンツヴァイクの人間概念を検討することは必要不可欠であった。というのも、人間概念の範例としてローゼンツヴァイクが念頭に置いているのがギリシア悲劇の英雄であるからである。

研究期間を通じて、ベンヤミンの歴史哲学ならびに言語哲学を、周辺諸科学 とりわけ美術史学と精神分析学 そして、同時代の哲学 とりわけハイデガーとローゼンツヴァイクの哲学

との関係を通して考察した。美術史学との関連については、リーゲルの触覚概念とベンヤミンの

歴史哲学ならびに芸術をめぐる思考との関連、フロイトの精神分析については、『トーテムとタブー』における呪術、模倣、遊戯、投射などの概念と、ベンヤミンの言語概念、また芸術解釈との関連を中心に研究をすすめ、両者がベンヤミンの歴史哲学と芸術哲学の理論構成において果たす役割について一定の見通しを獲得することができた。

同時代の哲学との関係については、ハイデガー、ローゼンツヴァイク、そしてベンヤミンの哲学に共通する思考のひとつが、人間と記号(使用)の関係と、その歴史(時間)性についての哲学的洞察であり、その思考の同一性と差異について、一定の理解を得ることができた。上記のハイデガー論とローゼンツヴァイク論において、関連する解釈の一部を示している。

ベンヤミンの歴史哲学を、言語哲学との関係に重点を置き、以上のような思想史的な文脈を踏まえ解き明かそうとした本研究は、歴史的生の根本的な理解が、時代固有の記号使用　この分析がベンヤミンの芸術哲学を構成する　と切り離せず、その命運の認識が、ベンヤミンの歴史哲学の核心のひとつであることを基礎づける試みであったと総括することができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 森田 團	4. 巻 2
2. 論文標題 『救済の星』における性格概念：ローゼンツヴァイクによる人間概念の再解釈	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『レヴィナス研究』	6. 最初と最後の頁 25 41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田 團	4. 巻 4
2. 論文標題 まなざしの原史：ベンヤミン『ベルリンの幼年時代』の「回廊」をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『形象』	6. 最初と最後の頁 32 - 51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田 團	4. 巻 1
2. 論文標題 罪のしるしとしての現存在：『存在と時間』における言語の根拠への問い	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『Zuspiel』	6. 最初と最後の頁 178-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 4件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 森田 團
2. 発表標題 廃墟としての文字：ベンヤミンにおけるイメージの問題の一側面
3. 学会等名 第15回形象論研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Dan Morita
2. 発表標題 Zwischen philosophischer und empirischer Aesthetik: Form, Gefuehl und die aesthetische Erkenntnis
3. 学会等名 Humboldt-Kolleg 2019, Tokio (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森田 團
2. 発表標題 瞬間・反転・啓示：ローゼンツヴァイク『救済の星』における性格概念
3. 学会等名 レヴィナス協会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森田 團
2. 発表標題 触覚の概念をめぐって：ベンヤミンとリーグル
3. 学会等名 シンポジウム「東方キリスト教との出会い」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森田 團
2. 発表標題 純粹な言葉としての記号：ヘルダーリンと悲劇的実存
3. 学会等名 早稲田哲学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森田 團
2. 発表標題 罪のしるしとしての現存在：『存在と時間』における言語の根拠への問い
3. 学会等名 ハイデガー『存在と時間』刊行90周年記念シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森田 團
2. 発表標題 心的装置と幻覚：フロイトにおけるイメージの起源
3. 学会等名 形象論研究会 特別公開研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関